

端午たんごがやつて来た。

山々は絢爛たる光を受け、緑の宝玉のような若葉のきらめきにあふれているが、日嗣ひつぎの御子みこの妻たる桜の君が統治する桜花宮おうかぐは、どこよりも華やかであった。

すうつと鼻から喉に抜けるような香りは、あちこちに吊るされた薬玉から漂うものだ。蓬と菖蒲で作られたそれは摘みたての花で飾られ、吹き込む風によって五色の紐をゆらゆらと揺らしている。

桜花宮前の馬場において競馬くらべうまが行われるのは、実に三年ぶりのことであった。

山内やまうちにおける端午の節句は、主に一日目の薬狩りと、二日目の競馬によって構成されている。

薬狩りはもともと、その名の表す通り、薬草を摘んだり、鹿の角を取ったりする神事であった。実際、一日目においてもっとも重要だとされるのは、八咫鳥やなぐす一族の長たる金鳥うが、典薬寮てんやくりょうで飼っている九色の鹿の角を取る「角落とし」と呼ばれる神事である。だが今では、「角落とし」と同時に、中央の所有するいくつかの狩場で、実際に獵を行うこともされるようになっていた。本格的な夏に備えて体力をつけるため、若い青年貴族

を中心に狩りを行い、捕らえた獲物を宮中に献上するのである。

その際、どうやって狩りを行ったのかを再現するのが、二日目の競馬の儀式であった。

人間と、三本足の大鳥という、二つの姿を持つ八咫鳥の一族において、同族の八咫鳥を『馬』として使役し、騎乗することが許されるのは一部の特権階級に限られる。

狩を行う青年貴族達は、この日のために選りすぐられた見事な大鳥うまの背に乗ったまま、土器かわらけでつくられた赤い鹿の像に向けて矢を射るのである。

競馬の馬場は中央にいくつもあり、どこで行うのかは山神さまの神意をうかがって神官が決定することになっていたが、それでも、桜花宮が三年以上選ばれないことはまずなかった。その実、この儀式は、神意などとは全く別の思惑で行われている側面があったからだ。

桜花宮の崖の側面に建てられた透廊すきろうには、外から見えないように薄い御簾がかけられている。

その内側には、桜の君に仕える女房達が腰を下ろし、さりげなく装束の端を御簾の下からのぞかせていた。緑色の御簾からはみ出るそれらの色は、薬玉にさされた芍薬やつじの花のように色鮮やかで、目に楽しい。

それを、桜の君に仕える筆頭である真緒まはの薄すはは、他人事のように見つめていた。

今、真緒の薄すはがいるのは、女房達が並ぶ透廊を見下ろすことの出来る舞台の上であ

る。

透廊の向かいにある山との中間地点には、空に向けて突き出した岩があり、その上には赤い鹿の像が立てられている。その周囲を、黒々とした翼を広げる大鳥に乗った青年貴族達がかわるがわるやって来ては、鹿の像に向けて、もったいぶったように弓を引く動作を繰り返していた。

彼らは気のないそぶりをしながらも、横目で食い入るようにして御簾のほうを気にしている。おそらくは、美しい出衣いでぎふを通して、持ち主の女の容色に思いを馳せているのだろう。

実際、御簾うちの女達もそれを分かっている、いかにして見栄え良くしようと四苦八苦していた。その努力を知っている真緒の薄は、長柄傘ながえがさの下から、彼らの様子をどこか微笑ましい気分で見やっていたのだった。

桜花宮に仕える女房は、その多くが若く美しい姫たちだが、普段、貴族の子弟たちとまみえる機会は滅多にない。家同士の都合で、相手の顔も知らないまま夫婦とされてしまうことも多かったから、競馬を口実にして、面通しをするのが通例となっていた。

競馬が桜花宮で行われた年は、他の馬場で行われた年よりも、貴族同士の婚姻がうまくいくことが多いという。中には、高位の姫に見初められて、婚姻を機に出世を果たす場合もあったから、下位貴族の男達は、ことさら気合を入れて今日に臨んでいるのだった。

数年前だったら、ほんのわずかな着物の裾の美しさに誰よりもこだわっていたのは自

分であつただろうと、真緒の薄は冷静に考えた。だが、豊かに波打っていた髪が尼削ぎへと変わった今となつては、全く、どうでもよい話である。

最高権力者である金鳥のもと、山内は東西南北の四つの領に分けられ、その実質的な統治は、四家と呼ばれる四大貴族に任されていた。

東領は東家、南領は南家、西領は西家、北領は北家。

領によつて異なる特産と得手とする技術を持ち、毎年、最高の品や人材が宮廷へと送り込まれることで、山内の中央は回っていた。

真緒の薄はそのうち、工芸を得意とする西家の一の姫として生まれついた。ほんの少し前まで、日嗣の御子たる若宮の後候補であつた女性である。

四大貴族から桜花宮へと美姫が送り込まれ、若宮に后を選ばせる段となつても、その美貌は群を抜いていた。真緒の薄を輩出した西家は、若宮が彼女を選ぶものと疑つていなかったが、結局、桜の君になつたのは、西家と敵対する南家出身の娘であつた。

真緒の薄は幼い頃から、自分が桜の君になるものと頑なに信じていた。

何より、幼少の頃に出会つた記憶のまま、美青年へと成長した若宮のことを誰よりも恋しく思つていたから、百万が一にでも、自分が選ばれないなんてことになれば、きつと生きてはいけなだらうなどと考えていた。

まったく、今から思えば、なんともおめでたいことである。

現実には、そう思い描いていたようにはいかなかった。

いざ、后選びのために対面した若宮は、真緒の薄にとって、ちつとも魅力的な男では



なかったのだ。

あろうことか后候補達に對して、「別に特別好きでもないし、将来、裏切ることがあるかもしれないが、それでも構わないなら入内を許す」とのたまう始末だ。

傲慢さを隠すことなく、自分に想いを寄せる姫たちの恋心を、踏みにじった。

誇り高い真緒の薄にとつて、到底、看過することの出来ない所業だった。

むしろ、それを受け入れた南家の姫が心配になり、勢いで出家して、彼女付きの女房となつてしまつたくらいである。

西家の者たちは絶望した様子だったが、自慢の長髪を切り捨てた瞬間、憑き物が落ちたかのように、真緒の薄は色恋に興味を失つた。

女房として仕えるようになった後、若宮は、冷徹にならざるを得ない状況だったのだと知つた。自分は分かつていなかったが、彼には政敵が多くいて、己の妻ひとりを選ぶにしても、甘いことを言っている場合ではなかったのだ。

それでも、厳しい事情を知りつつも后となることを選んだ南家の姫に感心しこそすれ、もう、若宮の妻となる自分を想像することは、全く出来なくなつていた。

己の中にこんな一面があつたとは意外だったが、恋におはれる自分よりも、己の矜持を守り通せた自分のほうが、好ましかったのだから仕方ない。

―儀式が始まつてから、もう半刻は経つだろうか。

そろそろ、最後の射手がやつて来る頃である。

最後の一人は、この儀式の花形射手だ。

花形射手は、それまでの真似事ではなく、実際に矢を放ち、鹿の像を射抜かなければならなかった。無事に射抜ければ吉兆、射抜けなければ凶兆とされてしまうから、かなりの大役である。

今年の花形射手は、真緒の薄のよく知る人物であると聞いている。

上級武官の養成所に入ってしまったってからはなかなか会えていなかったが、さて、あの小さな少年は、無事に役目を果たすことが出来るだろうか。

ふと、遠くから、振りたてられる鈴の音が聞こえた。

「来ますよ、真緒の薄さま」

自分の傍に控えた女房が、緊張した声を上げる。

鈴を鳴らすのは射手ではなく、先触れだ。

しゃんしゃんしゃんしゃん、と、けたたましく鈴を鳴らしながら先導する大鳥は、先ほどの青年貴族達よりも、ずっと速く飛んでいった。

いくらなんでも、あれは速度を出しすぎではないかと、ヒヤリとするくらいだった。

だが、飛び抜けていった先導の大鳥の後ろから、全く同じ速さで射手がやって来る。

大鳥の背中に伏せていた騎乗の人は、ふと、滑らかな動作で体を起こした。

銀糸の織り込まれた、涼しげな浅葱色の袖が翻り、あぶみの金がきらりと光る。

伸び上がるように背筋を伸ばした射手は、太ももでがっちり大鳥の背中を挟み込んだまま、流麗な動作で弓のつるを引いた。

ひゅうん、と。

笛のような高らかな音を立てて放たれた矢は、吸い込まれるようにして土器の鹿を射抜いた。

当たったことを示す旗が振られるのを見るまでもなく、パアン、と音を立てて、鹿の像がはじけた。

わっと歓声が上がリ、速度を落とした射手が、ゆるやかな弧を描いてこちらに戻ってくる。

その際、盛り上がる透廊の前を通ったが、他の青年達と違い、彼はそちらに一瞥もくれないことはなかった。

下に待機していた青年達が飛び上がり、彼の後ろへと続く。

華々しく着飾った貴族達を引き連れて、花形射手―北家系列の貴族で、三年前の若宮の近習、真緒の薄が弟のように可愛がっていた少年が、真緒の薄の待つ舞台の上へとすべるように降りて来た。

いや、これはもう、少年とは言えない。

軽やかに下馬した青年が、真緒の薄に向かってにこりと笑いかけてきた。

「ご無沙汰しております、真緒の薄さま」

親しげに掛けられた聞き覚えのない声は、この年頃の男に特有の、おのこやわらかなかすれ声だった。

真緒の薄はあつけにとられた。

誰だ、これは。

いや、名前は知っているし、それを問うのは馬鹿げていると分かっている。

だが、何度も会っている者なのに、まるで別人のようだった。

「あなた……雪哉ゆきやなの？」

「はい。桜の君に、端午の『葉』をお届けに参上つかまりました」

まじまじと見ると、確かにそれは雪哉の顔だったが、やはり、別人とも思っても仕方がないくらいに変わっていた。

かつて、子どもらしく丸みを帯びていた頬は、いまや武人特有のしっかりした骨格も明らかに、青年らしく引き締まった輪郭を描いている。健康そうに日に焼けた顔の中で、幾分淡い色の瞳がきらきらと光っており、身長も、姿を見ないこの三年の間にぐっと伸びていた。今では真緒の薄が見上げるほどである。

すっきり、狐にでも化かされたような気分だった。

「真緒の薄さま？」

怪訝そうに問われて我に返り、慌てて慣例どおりの答えを返す。

「よう、参らせられました。桜の君も、さぞお喜びでしょう」

「恐悦至極に存じます」

うやうやしく頭を下げた雪哉は、背後へと目配せをする。

すると、一団の後ろから黒服の武人達が足早に進み出て、三方に載せた鹿肉や角、薬草などを並べ始めた。

目録にあるもの全てが揃ったことを確認し、真緒の薄は頷く。

「確かに、受け取りました」

「桜の君さまに、何卒よろしくお伝えくださいますよう」

爽やかに一笑した雪哉はひらりと飛び上がり、再び大鳥の背中におさまった。

「それでは、失礼いたします」

軽く会釈をすると、力強く声をかけ、舞台から飛び上がる。

興味津々にこちらを見やっていた派手な装いの青年貴族達も、名残惜しげな様子を見せながら、雪哉の後に続いた。

彼らが飛び立ち、朝廷のほうへと帰って行くのを見送ってしまうと、舞台の上には桜の君に届けられた『薬』と女房達、そして、桜花宮へと運び込むのを手伝うために残ってくれた、数人の武人達だけとなった。

その武人の中に、ここにあるはずのない顔を見つけて、真緒の薄は目を見開いた。

「澄尾<sup>すみお</sup>。あなた、こんなところにいてよろしいの？」

色黒で、武人にしては幾分華奢な体格をした彼は、常は護衛として若宮の傍らに仕える存在である。

官廷人たちから「うつけ」の名をほしきままにしている若宮は、何か気になることがあると、平気で儀式をすっぱかすという悪癖を持っていた。しかも、その妻である桜の君はそれをたしなめるどころか、進んで協力する節があるものだから、始末に負えない。昨日も、若宮がお忍びで宮中を抜け出したことを受けて、桜の君が文字通り身代わりとして、若宮がいるはずの招陽宮<sup>しょうようぐう</sup>へと出て行ってしまったのだ。本来なら、桜花宮か

ら出るはずのない桜の君の不在がばれやしないかとはらはらしていたのが、ここに澄尾がいるということは、あちらはどうにかなったのだらうか。

澄尾は軽く苦笑して駆け寄って来ると、真緒の薄から少し距離を置いて立ち止まった。

「ご心配をおかけしましたが、無事に、若宮は招陽宮にお戻りになりました。桜の君も、夜にはこちらへお戻りいただけでしょう」

今は招陽宮にいらっしゃいますので、と周囲の者には聞こえない大きさの声で告げられて、「そう」と真緒の薄は安堵の息をつく。

若宮夫妻が無茶をした時、尻拭いをするのは決まって澄尾と真緒の薄の仕事となっていた。慣れてしまった感のある自分がそら恐ろしい気もしたが、それを言うのも今更である。

肩の荷が下りてしまえば、やはり気になるのは、先ほどのことであった。

「驚きましたわ。花形射手は雪哉になったと聞いてはいましたけれど」

「ああ……。あいつ、大きくなったでしょう？」

「あの子、前に会ったときはわたくしより小さいくらいだったのに」

真緒の薄の実弟は、上級武官の養成所――勤草院<sup>けいそういん</sup>へ、雪哉と同時に入っている。今でも時々会う機会があるが、それでも、あんなに急に背が伸びたりはしていなかった。

「外書いわく、男子三日会わざれば、という奴ですかね」

苦笑する澄尾に、真緒の薄はしみじみと呟いた。

「成長が、嬉しいような、寂しいような……」

これは果たして、喪失感なのだろうか。

無邪気な少年がいなくなってしまうのだと思えば、喜ぶべきことだとは頭では分かっている、なんとも名状しがたいものがあつた。

桜花宮を出た足で、澄尾は招陽宮へと舞い戻る。

つい最近になって護衛に加わった青年達は緊張した面持ちをしていたが、澄尾が戻つたのを見ると、一斉にほっとした顔つきとなつた。

まあ、無理もない。

彼らが守る離れの中にいるのは、主君ではあるが、常識では測れない夫婦である。突然のわがままに対応するのは、彼らにはいささか荷が重かつた。澄尾がいないうちにとんでもない命令をされたらどうしよう、と戦々恐々としていたらしい彼らは、即座に澄尾を中へと通した。

「戻ったぜ」

「入れ」

とても主に対するものとは思えない気安い口調で声をかけ、澄尾は扉を開く。

窓に面した文机の前で、見た目のよく似た格好をした若い夫婦が、くつろいだ様子で茶を飲んでいた。

「ご苦労だったな」

桜花宮はどうだった、と聞いてきた美青年は、澄尾の幼馴染であり、かつ、忠誠を誓った主でもある若宮殿下である。

薄紫の着流しにくせのない黒い髪を流し、平然とあぐらをかいている。

「無事に終わった。桜の君が不在なのも、当然だが気付かれてねえよ」

「雪哉はどうだった？」

面白がるように言ったのは、夫と全く同じ格好をした、桜の君――はまゆ うびろ浜木綿姫である。

部屋着といえど、これも男装をしていることになるのだろうが、しょっちゅう若宮の身代わりになっている長身の姫君の姿は、これ以上なく様になっていた。

「そっちも、全く問題ありません。ですが、桜の君さまへは『不在のまま儀式を進めるなどということは、もう金輪際ないようにしてください。そして、なるべくお早くお戻りくださいませ』と、真緒の薄さまより伝言です」

浜木綿に対しては幾分かしこまって返答すると、男装の姫君はけらけらと声を立てて笑った。

「あいつも懲りないな。言っても聞かないと、いいかげん分かりそうなものだが」

「言わずにはおれないということでしょう」

自分も全く同じ気持ちだったので、わずかに感情をこめて言ったのだが、主君夫妻にささやかな皮肉は全く通用しなかった。

「それにしても、真緒の薄が貴族連中に顔を見せちゃったってことは、これからうるさ



くなるだろうね」

「と、言うത്？」

尋ね返した若宮に、浜木綿はふふん、と鼻を鳴らす。

「決まっている。縁談だよ」

若宮は「ああ……」と眉尻を下げた。

「真緒の薄殿の場合、出家した、というのは、あまり問題にはならないか」

「むしろ、出家したって気を抜いて、顔を見せちゃったのは逆効果だったと思うね」

浜木綿の言葉に、澄尾は内心で「確かに」と同意する。

若宮の後候補だった時は華やかな装いに手を抜かなかった真緒の薄であるが、女房として浜木綿に仕えることに決めて以後は、色味を抑えた地味な格好を好むようになっていた。しかしそれは、山内一の美姫と謳われたその容色を損なうどころか、むしろ彼女自身の持つ輝かしさを、それまで以上に引き立てていた。

今日だって、『薬』を引き渡すわずかな間だけでも、青年貴族達の目を釘付けにしてやまなかったのだ。

「還俗させるさせないは、主である私の胸ひとつだからねえ。見てな。明日から、桜花宮にはひっきりなしに文が届くようになるよ」

口端を吊り上げた浜木綿に、若宮はふむ、と軽く首をかしげた。

「その様子だと、お前は真緒殿の縁談に乗り気なのか？」

「決まっているだろう。あの、真緒の薄だぞ！ あんなに美しくて氣立ての良い娘を、

飼い殺しにする趣味は私にはないんだよ」

そんな勿体ないことが出来るか、と浜木綿は叫ぶ。

「もちろん、下手な貴族にくれてやるつもりはない。真緒の薄を娶るってことは、そっくりそのまま西家を味方につけることになるからな。いるだろう？　西家の力が必要で、おあつらえ向きのお相手が」

話の向かう先に気付いたらしい若宮が、きゅつと口をへの字にした。

「おい……」

「いい機会だ。何度も言っていることだが、お前、真緒の薄を側室に迎え入れろ」

自身の正室に鋭い目で睨まれた若宮は、うんざりしたようにため息をついた。

「私とて、何度も言っているだろう。西家を味方にするといえは聞こえは良いが、そうすれば間違いなく、西家系列の貴族が調子付くと」

「今のお前に、そんな贅沢をほざいている余裕があるか。お前は政敵ばかりで、ただでさえ味方が少ないんだ。門閥で幅をきかせるのには目をつぶってでも、地盤を固めるべきではないのか」

「そこは、決して目をつぶれない問題だ。今後の宗家の方針に関わる話ゆえ、そう、安易な方法をとるべきではない」

「それでもたまたして殺されでもしたら、意味がないだろうと言っているんだ」

—こうなってしまうと、完全に澄尾がくちばしを挟める次元の話ではなくなる。

沈黙する護衛の前で、とても夫婦のものとは思えない口論は、どんどん過熱していっ

た。

「ふざけるな、真緒の薄のどこが不満なんだ！ あの娘は絶対、いい母親になるよ。私が男だったら、間違ひなく真緒の薄を正室にしていたね」

貴様の目は節穴か、と浜木綿は若宮の胸倉をつかみ上げた。

「論点がずれている。私は別に、真緒殿に不満があるわけではない」

「当たり前だ。不満を言うようならこの場ではったおしてくるわ」

「ちよつと待て。そなた、真緒殿の一体何なのだ」

「私は真緒の薄の主で、貴様の妻だ。その私が良いと言っているんだぞ。側室に迎え入れるに、他に何の問題がある」

「問題だらけだ。とにかく、真緒殿の入内は認めない」

されるがままになりながら全く退かない若宮を、浜木綿は舌打ちした後、唐突に解放した。

澄尾は新たに注ぎ直した冷茶を、二人の前にそつと差し出す。

——いささか激しいやり取りではあるが、これが、この変わり者夫婦なりのじゃれあいであるのは承知している。

玻璃の碗を受け取った浜木綿は、一息に飲み干した後、半眼になって若宮を見据えた。

「……知っているんだぞ。お前、西家の当主と次期当主から、あいつを側室に迎え入れるようにとせつつかれているだろう。あまり無下にしていては、問題になるのではない

か？」

浜木綿よりも幾分行儀良く茶を飲んだ若宮は、透明な碗をトンと床に置いた。

「だとしても、だ。家の関係からして、真緒殿を側室に迎えることは出来ない」

「どうしてもか」

「どうしてもだ」

決して演技というわけではなく、浜木綿は残念そうな顔をしていた。

「では、どうする。真緒の薄を出家させたままにしておくのは、あまりに惜しい」

今度は、若宮も素直に首肯を返す。

「それに関しては同意見だ。可能ならば、四家の紐帯を強めるのに一役買って欲しいものだが」

浜木綿は真剣に思案する顔となった。

「四家に、そう年頃の青年貴族がいたかね？ 咄嗟に思いつくのは、東家の青嗣あおつぐか、北

家の喜栄きえいくらいだが……」

「どちらもすでに正室がいるだろう。真緒殿を、まさか側室にするわけにもいくまい」

「じゃあ、傍流にまで候補を増やすしかないが、そうすると今度は西家と家格がつりあうかが問題になって来るぞ」

どうしたものか、と唸った二人に、それまで黙って話を聞いていた澄尾は、軽く咳払いをした。

「どうした、澄尾」

「何か名案でもあるのか」

同じ顔でそろって振り返った二人に、澄尾は苦笑する。

「……名案かは分からないけどな」

ひとつ、提案がある、と。

\* \* \*

「悪いなあ、雪哉。手伝ってもらっちゃまってよ」

眉を八の字にして大きな体を丸める茂丸しげまるに、雪哉は軽く笑った。

「いいから、さつさとこんなもん終わらせちまおう」

雨が降ると、勁草院における実技の授業は座学へと振り替えられる。雪哉本人は、早々に課題を終えてしまったが、心優しくも座学にはめっぽう弱い親友のために、丁寧に解説をしてやっていた。

山内の統治者一族の護衛集団は、山内衆やまうちしゅうと呼ばれている。

山内衆になるためには、有力者による推薦をもらった後、勁草院という養成所に入り、三年間の修行に耐えなければならない。その修練は厳しく、脱落していく者が後を絶たなかった。

身につけるべきは、『剣術』『弓射』の他、大鳥うまの乗り方や飛とび方を学ぶ『御法』など  
の実技のほかに『礼楽』や『明法』などの座学を合わせた、六芸四術りくげいしじゆつ二学にがくの素養とされ  
ていた。

初年度は座学で学ぶべきことも多かったが、二年目ともなると、その比率はもっぱら実技へと偏るようになる。大してやる意味もない課題を終えてしまえば、ほとんど休暇と同じになるから、院生達は好き勝手に、あちこちで羽根を伸ばしていた。

もうじき、終業の時間だ。

教官に文句を言われない程度に茂丸の課題を仕上げ、さて、何かつまみに厨くりやにでも行こうかと立ち上がりかけた時だった。

「おい、雪哉。お前、最近随分とお盛んらしいな」

同輩から掛けられた声に、雪哉は振り返った。

「お盛んって、何が」

「とほけるなよ」

「端午の節句以降、艶書がひっきりなしに届けられたって聞いたぞ」

「桜花宮に勤める女の子達からな」

雪哉を見る連中の顔には、皮肉っぽい笑みが浮かんでいる。

「さすが、競馬で花形をつとめた貴族さまは違うねえ」

―これは、やつかみ半分、からかい半分といったところか。

そこまで深刻にはならない気配を感じ、雪哉は苦笑したが、それにあっけらかんと答えたのは、隣の茂丸だった。

「でもこいつ、それ、全部断ち切ったんだぜ」

だからお盛んってのは違うと思うぞ、とのんきに続けられて「嘘だろー」とあちこち

から悲鳴が上がった。

「馬鹿じゃねえのか」

「せっかくの機会だったのに！」

「お前、何のために花形射手をやったんだよ」

噛み付くようにあれこれ言われて、雪哉はうんざりと返す。

「別に俺は、なりたくて花形射手になったわけじゃないから。他に、やれる奴がいなかったってだけのことだよ」

それを言った瞬間、食堂の隅で本を読んでいた男がびくりと肩を震わせたが、雪哉を取り囲む者達はそれには気付かず、はああ、と大げさに嘆息したのだった。

「もったいねえ」

「せめて、一度会うくらいすればよかったのに」

彼ら自身にそういう話があったわけでもないのに、何故か未練がましい様子が鬱陶しい。

「いや、それであつちが本気になったら、面倒くさいだろう」

投げやりに言った瞬間、その場の空気が露骨に冷たくなった。

「こいつ……」

「くそやろうが……」

「いつかばちが当たって、めちゃくちゃ痛い目を見ればいいのに……」

怨嗟の聲が渦巻く中、ただ一人、茂丸だけが興味深そうに雪哉の顔を覗き込んだ。

「じゃあお前、一体、どういう娘さんだったら付き合う気になるんだ？」

「あれ。茂さんも気になるの？」

「おうよ。お前、そういう話は全然しないからな」

親友からの思わぬ追撃に、そうだな、と雪哉は頬をかいいた。

「俺の身に何かあった時に頼れる実家があること。家格がつりあい、婚姻によってなんらかの政治的な利益があること。それで、冷静に状況判断が出来て、夫婦間に恋愛感情を絶対に持ち込まないと約束できる女なら、少しは考えるかな」

大真面目に返答したつもりだったのに、話を聞いていた同輩達は一斉に顔を引きつらせた。

「いや、そういうんじゃないかな」

「色白がいいとか、胸がおおきいとか、そういう軽い回答を求めてたんだが」

なんだこいつら、と雪哉はいよいよ面倒になってきた。

「見た目なんて、年くえばみんなしわくちやで同じようなもんでしょ。美人を抱きたいなら花街に行きやいいじゃないか」

しんと静まり返った中、同輩のひとりが低くうめいた。

「……今後、雪哉のことを格好いい、とか言う女の子に出くわしたら、俺達は殴ってでも止めてあげるべきなんじゃないだろうか」

「同意見だ」

「そうかあ？　俺は、妹に恋仲として雪哉を紹介されても、別に考え直せとは言わない



けどな」

「茂さんは雪哉に甘すぎだよー」

「妹さんがかわいそうだ」

なんとも言えない雰囲気になった一同の中、茂丸はどこか困ったように雪哉を見た。

「でも、せっかく夫婦になる相手に恋心を持つちゃいけないってのは、確かに寂しい気がするな」

茂丸の言葉に、雪哉は、自分でも冷やかに見えることを自覚している顔で笑った。

「一時の盛り上がり任せて番になったところで、絶対に幸せになんかなれないよ。燃え上がるような恋情がさめたあとに残るのは、どうしようもない現実だけだ」

ならば、最初から感情を介さずに婚姻を結んだほうがずっといいと、雪哉は本気で思っていた。

「どうせ、俺みたいな貴族が祝言を挙げる場合には、政治がついて回るしね。寂しいも楽しいもないさ。相手には何も望まないしー俺に、何か望まれても困る」

騒いでいた者達はきまわずそうに黙ったが、茂丸は雪哉を哀れむように、しみじみとした口調でつぶやいた。

「お前が本気で恋する相手ってのは、一体、どんな子なんだろうなあ……」

「そんなおひとが現れるとは思えないし、別に欲しいとも思わないね」  
ぱん、と大きな音がした。

見れば、それまで黙っていた男が、読んでいた本を机に叩きつけ、荒々しく立ち上が

つたところであつた。

「明留<sup>あきる</sup>? どうした」

戸惑う同輩達を一顧だにすることなく、「千早<sup>ちはや</sup>!」と明留は不機嫌に声を上げた。

「小雨になったようだ。僕の鍛錬に付き合え」

呼ばれた千早は、壁に背を預けて目をつぶっていたが、その声にうるさそうに片目を開いた。

千早は身分が低く、明留の実家である西家の後ろ盾によつて院生でいられる部分があるため、事情をよく知らない者からは、明留の付き人のように思われることもままあつた。しかし、勁草院は実力主義である。

その実、優秀な千早が実技でおくれがちな明留を見かね、ぶっきらぼうにも面倒を見てやっている、というのが本当であつた。

貴族にありがちな命令するような口調に、いつもだったら揶揄のひとつでも返しただろうが、明留の不機嫌の原因に、何か察するものがあつたらしい。

やれやれ、とでも言いたそうな顔を雪哉達に向けた後、特に口を開くでもなく、明留に続いて食堂を出て行つたのだった。

ぼつぼつと雨粒は垂れているものの、日は出ているし、風もない。

大烏の速さを決めるのは、そもその大烏の良さよりも、御者の腕によるところが大

きい。明留は、大烏に姿を変えた千早の背中にまたがると、射場を出来る限りの速さで飛びぬけた。

びゅうびゅうと風が顔を切る。

ここ、と見定めた目印のところでは姿勢を起こして弓を引くも、放たれた矢は見当違いの方向へと飛んで行ってしまった。

「ちくしょう」

的の前を通り過ぎ、もう一回だ、と声をかけるも、大烏はカアとも鳴かずに地面へと向かい始めた。

「おい待て、千早。どこに向かっている」

滑空して地面すれすれになったところで、大烏は身震いして、明留を地面に振り落とす。

「いたっ！ お前、何をする」

「少し落ち着け」

空中で大烏から人形じんぎへするりと戻った千早は、尻餅をついた明留の前で軽やかに着地した。

「焦っても結果はついて来ないぞ」

また落馬したいのかと淡々と千早に言われ、明留は子どもっぽい仕草だと分かっているが、唇を尖らせずにはいられなかった。

「しかし……このままでは、進級試験に受かるかどうかも怪しい……」

「まだ半年ある。お前が焦っているのは、雪哉がいるからだろう」

図星をつかれて、明留はぐうの音も出なかった。

もともと、端午の節句に花形射手の候補として名前が挙がっていたのは雪哉ではなく、西家の御曹司であり、真緒の薄の実弟である明留であった。

しかし、明留はどうやっても的に矢を当てることが出来なかったもので、やむを得ず、本人は全く出るつもりもなかった雪哉にお鉢が回ってしまったのだ。あまりに悔しく、また、雪哉の前座として他の貴族連中と一緒にされるのも嫌だったので、端午の競馬の参加そのものを拒否してしまった。

雪哉は、明留ほどではないとはいえ、四大貴族のうち北家の現当主に連なる、れっきとした貴族である。

ただ、武家として名高い地方貴族の家で生まれ育ったゆえ、明留よりもはるかに武術の腕は良い。勁草院に入った当初はさほど気にならなかったその差も、時を経るごとに、徐々に明らかかなものとなり始めていた。

「雪哉と比べるのは不毛だ。あいつはもともと、おそろしく目がいい」

普段は寡黙なくせに、どうしてこういう時だけ饒舌になるのかと、八つ当たり気味に明留は考えたが、千早の口は止まらなかった。

「こればかりは、もって生まれたものだ。努力でどうこうなる問題じゃない」

明留は進級して以降、背が伸びて平衡感覚が狂った。それは雪哉も同じはずなのに、自分以上に背が伸びたあいつは、たやすくそれを克服してしまった。

目の良さだけではない。雪哉の能力は、どう考えても明留よりも上だった。黙ったままの明留に、千早はため息をつく。

「そうすねるな。身体能力は雪哉よりも劣っているかもしれないが、少なくとも性格は、あいつよりもお前の方がいい」

千早は真顔で言うので、冗談なのか本気なのかよく分からない。雑な慰めに、それはどうも、と明留が苦々しく返すと、ふと、千早は眉をひそめた。

「なんだ……。他に、何かあるのか」

「別に、何もない」

明留は顔をそらしたが、それでも無言で睨まれて、すぐに降参せざるを得なくなつた。

「ああ、もう。これはまだ、内密にしておいて欲しいのだがな。実は、姉上にいくつか縁談が来ていて」

「ほう？」

「一番の候補に挙がっているのが――どうやら、雪哉らしいのだ」

千早が、両目を見開いた。

「……それは、また」

その先は声に出さなかったが、「ご愁傷さま」という言葉が明留にははっきりと聞こえた気がした。

「あれが、義兄か」

「屈辱的な話ではあるが、それはまだいいのだ。でもあいつ、伴侶のことをひどく言うものだから……」

もしも、本当に姉が雪哉に嫁ぐことになったら、間違ひなく不幸せになってしまいうだろうと明留は思ったのだ。だが、姉本人はそれをまだ知らない上、実際に家の関係で縁談が進んでいる以上、文句を言うわけにもいかず、逃げるようにして出てきてしまった。

明留の言葉に得心のいった様子で、千早は腕を組んだ。

「だから、さっきのあの態度か」

「大人気ないと思うか」

「気持ちには、分かんんでもない」

ああ、嫌だなあ、と地面に座ったまま明留は頭を抱える。

「本当に雪哉と姉上の縁談がまとまったら、僕はどうしたらいいんだ……」

同情するような千早の眼差しを感じながら、明留が悲壮に唸った時だった。

「―それは、無用の心配になりそうだが」

気配もなく、唐突に響いた声に驚いて顔を上げると、修練場の建物の陰から、見知った顔が現れた。

「澄尾さん」

低い身分の生まれながら勁草院を首席で卒業し、今は若宮殿下の護衛として活躍する先達である。

目札する千早に軽く片手を上げて近づいてくる澄尾に、明留はあわてて立ち上がった。

「失礼しました。あの、でも、どうしてこちらに？」

「君を探してたんだ。さっき言っていた、姉君の縁談の件。あれ、白紙に戻ったぞ」  
えっ、と思わず素っ頓狂な声が明留の口から飛び出した。

「白紙について、一体、何があったのですか」

澄尾は、どこかきまりが悪そうに頭を掻いた。

「それがだな。命令となれば雪哉は逆らわないだろうから、先に、真緒の薄殿に話を通そうとしたのだが――ご本人が、ひどく嫌がられたのだ」

\* \* \*

端午の節句以降、真緒の薄を見初めた青年貴族達から、案の定、彼女を還俗させてほしい、ぜひ正室に迎え入れたい、という文が、雨あられのごとく桜花宮に届けられた。それを知ってなお、真緒の薄本人は全く相手にしていなかったが、主君である桜の君と若宮に揃って話があると言われてしまえばことは別である。最初は、神妙な顔で縁談云々についても黙って耳を傾けていたのだ。

様子が変わったのは、その相手として、雪哉の名前が出てからであった。

「嘘でしょう。どうしてそこに、雪哉の名前が出てきますの？」

大きな目をめいっばいに開いた真緒の薄は、啞然とし、ついで、激怒したのだった。

「改まって話とおっしゃるから、何かと思えば！ 四家の間で重大な問題が発生して、わたくしが出て行かなければどうしても、というのなら、まだ覚悟の決めようもありますわ。でも、よりにもよって、相手が雪哉ですって」

ふざけているの、と叫んだ真緒の薄は、怒髪天を衝く勢이었다った。

「どう考えても、必要のない縁談でしょう。一体、何を考えてそんなことを言い出したの？」

つかみかからんばかりの勢いが予想外だったのか、豪胆でならした桜の君が、珍しく顔を青くしていた。

「いや、しかしだな、真緒の薄。美しいさかりのそなたをこう、桜花宮に囲い込んだままというのも忍びなくて……」

「余計なお世話ですわ！」

彼女らしからぬ、吐き捨てるような言い方だった。

「それを望んで出家したのはわたくし自身なのに、わたくしの気持ちを全く無視して話を進めるのね」

浜木綿を睨み、赤くつややかな唇をつんと尖らせる。若宮は、どこか困った顔で真緒の薄をなだめようとした。

「逆に、良いように考えてくれ。必要に迫られての話ではないから、こちらも、真緒殿の意見を無視して話を進めるつもりはないのだ。だが、雪哉だったらもしかしたら、あなたもまんざらではないと思うのではないかと……」



それを若宮が言った瞬間、真緒の薄の顔から表情が抜け落ちた。

「……なんですって？」

「違うのか」

「誰がそんな、馬鹿なことを？」

静かな声が、逆に恐ろしい。

色恋の機微には疎い若宮も、これはまずいと遅ればせながら気付いたらしい。

あわてて口をつぐんだものの、ふらふらと泳いだ目が、一瞬、黙って控えていた澄尾の方を向いた。

真緒の薄は弾かれたように振り返ると、澄尾を、真っ赤になった目で睨みつけたのだった。

「そう。よく考えたら、そんなことを言えるのは、あなたくらいしかいませんでしたわね」

澄尾は諦めて、小さく息を吐いた。

「申し訳ない」

「どうして」

「端午の時に、あなたの目が、雪哉を追いかけていたのだから」

「それは――確かに、競馬の花形をつとめたあの子は立派でしたわ。でもそれは、弟が大きくなったのを喜ぶ気持ちであって、そんな……決して、そんなつもりではありませんでした。それなのに、あなた、下世話な勘繰りもいいかげんになさいな！」

言っているうちに興奮してきたのか、彼女の唇はわなわなとふるえ、色の濃い琥珀玉のような瞳にはうつすらと水の膜がはった。

「……申し訳ありません。はやとちりをしました」

「許さないわ。これは雪哉と、わたくしに對する侮辱よ」

落ち着こうと何度も深呼吸をした真緒の薄は、乱暴に立ち上がり、澄尾を鋭くねめつけた。

「……前々から思つてはいたけれど、さすがに今回の件は我慢がなりません。わたくし、あなたのそういうところ、人として軽蔑しますわ」

もう二度とわたくしに近づかないで、と悲鳴を上げるように言うと、真緒の薄は涙をこぼし、招陽官を出て行つてしまった。

「おい、待て、真緒の薄！」

浜木綿が後を追つたものの、若宮と澄尾は気まずい沈黙の中に取り残されたのだつた。

\* \* \*

「そんなこんながあつて、若宮殿下も桜の君も、もう勝手な話は進めないと真緒の薄殿と約束を交わされたわけだ」

少なくともしばらくのうちは、縁談が持ち上がることはなさそうだと、言われ、明留は、安堵の息を吐くのを止めることが出来なかった。

「そうですか……」

泣くほど嫌だったのかと思えば姉が可哀想でならなかったが、それでも、望まぬ縁談を進められるよりも、よっぽど良かったと思う。

だが、流れた話と思って気が楽になってしまうと、今度は、元凶となった澄尾が、なんとも恨めしく思えてきた。

「そもそものして澄尾さんは、姉上には雪哉がいいなどと思ったのですか？ あいつは、細君に求める条件として、夫婦間に恋愛感情を持ち出さないこと、とか言い出す冷血漢なのです。姉上と合うわけがないではありませんか」

若干非難するような言い方になってしまったが、澄尾はそれを不快に思うでもなく、ただ、弱ったように笑った。

「雪哉が、そう公言しているのは知っている」

「だったら何故」

「だからこそ、良いと思ったんだがなあ……」

澄尾が何を言っているのか分からず、明留はきょとんとした。

「どういう意味です？」

千早に訊かれて、うーん、と澄尾は曖昧に唸る。

「雪哉の酷い言いざまは、そうだな。言ってみれば、若宮が、桜の君を口説く時と同じ論理が働いていると感じたんだ」

若宮は、浜木綿に桜の君になって欲しいと言った時、たいそう辛らつな言葉で了承を

得ようとしたという。

「自分は、決して良い夫ではない。あなたに恋しているわけではない。政治の動きによつては、側室を迎えるかもしれないし、あなたを裏切るかもしれない。そうであっても、不満を言うことは許されない。それでもいいか——ってね」

「それはまた……随分な愛の告白ですね」

それを言われて、喜んで頷く女はまずいと思う。浜木綿姫が、何を思つてその言葉に「うん」と返したのか、明留には全く想像がつかなかった。

「まあ、傍からすると酷い言い草だよな。でも、それを言つたあいつの置かれた状況を知つてゐる俺としては、あの言葉は、これ以上ないくらい誠実なものに聞こえたんだ」  
現在、宮中において、若宮の敵は多い。

いくら若宮が努力したところで、政変が起こるかもしれない。

本人の意思とは関係なく、后を見捨てなければならぬ場合が来るかもしれない。

先に、若宮が死ぬかもしれない。

君主の立場からして、あなたは特別だと、愛を傾けることが許されない状況になるかもしれない。

—それでも、私の妻になってくれるか。

「あの状況下で『必ず幸せにする』なんて言つたら、それこそ騙すのと変わりない」

辛い状況になるけれど、それでもあなたにいて欲しい。それを踏まえたあなたの意思で、どうか自分を選んで欲しい、と。

「口先だけで甘いことを言う無責任な奴よりも、よほど信用が置けるだろ？」

雪哉も同じだ、と澄尾は静かに語る。

「あいつ自身、生まれに関してはいろいろあったみたいだしな。その上、若宮に忠誠を誓っている身だ。明日はどうなるか分からないと覚悟を決めている上、伴侶を不幸にするわけにはいかないと思っているから、ああも慎重になる」

明留は何も言えなかったし、千早は感情の窺い知れない目で、じっと澄尾を見つめている。

澄尾はため息をついた。

「それに、ここだけの話、若宮夫妻が、真緒の薄殿の意思を完全に無視して縁談を考えているのを見ちまってな。さすがにどうかと思っただんで、ちよつとでもあの方にとつて、ましな方向にもって行きたかったんだが……」

どうにも、逆効果だったらしい。

明留は、澄尾の様子に困惑しながらも、おずおずと言った。

「姉上は、愛しいと思う方と一緒にになりたいと考えているはずですから……。理由があるとはいえ、冷たい物言いの雪哉をあてがったら、怒るのは当たり前だと思います」

澄尾は、「そうかもな」と呟くと、わずかに眉間のあたりを曇らせて、どこか遠くを見るような目となった。

「……それでも、真緒の薄さまの雪哉を見る目は、とても鮮やかだったんだ」

ふと明留は、よく見ているな、と思った。

しかし、それ以上のことに考えが及ぶ前に、澄尾は勢いよく顔を上げて、明るく笑ったのだった。

「ともかく、しばらくは姉君のことは気にしなくても大丈夫だと、それだけ伝えに来たのだ」

「恐れ入ります」

「せっかくここまで来たからな。稽古を見てやろうか」

快活に言った澄尾に、明留よりも先に千早が「お願いします」と言った。

「こいつに、手本を見せてやってください」

「いいだろう。『馬』を頼めるか？」

返事の代わりに大鳥へと轉身した千早を満足げに見やり、澄尾は頷く。

「よし。じゃあ、行こう」

澄尾を乗せた千早は空高く舞い上がると、行き過ぎではないかと思えるほどに修練場を大回りして、距離をとった。

随分と遠いな、などと明留が思っていると――不意に、鳥影がぶれて見えた。

あ、と思わず声が出た。

実習では何度も千早が大鳥として飛ぶ姿を見てきたが、こんなに飛ばす姿は見たことがない。ほほ、背中に誰も乗せていない状況での全力飛行と変わらないのではないだろうか。

とてもではないが、騎乗しながら、弓を射ることが出来るような速度ではなかった。どんだん明留の方に近づいてくるが、澄尾はほとんど千早の背中と一体になるように伏せていることもあり、人が乗っているようにはとても見えない。

と、思った瞬間だった。

風に煽られた羽のような軽やかさで、澄尾は大鳥の上で身を起こす。

それから、矢をつがえて放つまでの間隔があまりに短くて、どうやって矢を放ったのか、全く、明留は目で追うことが出来なかった。

ただ気付くと、一陣の風のごとく澄尾を乗せた千早は過ぎ去っており、的の中心には白羽の矢が深々と突き刺さっていたのだった。

おそろしいほど速くて、正確だった。

「ちゃんと見えたか？」

今見たものが信じられず、呆然とする明留のもとに、翼を緩めた千早と澄尾が戻ってきた。

「……あんまり、よく分かりませんでした」

澄尾が背中から飛び降りるのとはほぼ同時に、千早が人の姿に戻る。

「だろうな。俺も、御者を乗せてあんなに飛ばせたのは初めてだ」

「まあ、これでも山内衆だからな。後輩の院生に負けてちゃ話にならねえよ」

はは、と澄尾はいやみなく笑う。

「雪哉よりも、うまかったです。あなたが競馬の花形をつとめればよかったのに」

「そりゃあ無理だ。俺は、貴族出身じゃねえからな」

さりとて言った澄尾に、明留は急に胸をわしづかみにされたような心地になった。

「なあ、明留。雪哉の奴は優秀だからよ。焦る気持ちにはよく分かる。だが人には、生まれつき持っているものと持たないものがあるんだよ。どうにもならないことを他人と比べて羨むのは、空しいもんだ。だったら、今の自分が持っているもので、何が出来るのかを考えたほうがよっぽど有益だとは思わねえか？」

—この人は、もしかしたら自分よりも、よほどそれを感じているのかもしれない。だまりこくった明留を見る澄尾の目は、ひどく優しかった。

「純粹な武人としての力なら、俺や千早はお前よりも上だが、いくら腕が立ったって、俺達は政治の分野じゃ、宮廷の奴らと渡り合うことは出来ない」

「それは……」

「分かってるだろう？ 身分が低いからだ」

そこへいくと、君は生まれだけで一目置かれると言われて、明留は馬鹿にされたような気分になった。

「でも、それは！」

「お前も、山内で貴族として生まれた以上、生まれ持ったもんを武器にしていんだ。俺達は体、お前は身分、そこに何の違いがある？ 問題は、その武器を何のために使うかだ」

違うか、と澄尾の鋭い視線に射抜かれて、明留は釈然としないまま口をつぐんだ。



「欲張って、あれもこれもと中途半端に手を出して、結局つぶれちゃうのはもったないぜ。お前は、高い身分も、賢い頭も、それにおごらないだけの高潔さも持ってたんだ。自分がないものが輝いて見えたとしても、それを言ったって詮無いじゃねえか」

それが言いたかった、とでも思っているような顔で、千早は無言のまま拍手をした。

「明留。お前は、良い護衛にはなれないかもしれないが、良い側近にはなれるだろうよ。それじゃ不満か？」

澄尾に試すように言われて、なんだか泣きたくなった。

「……いいえ」

「なら、良かった」

でも、でも、と明留は唇を噛む。

「それでも、やっぱり、悔しいんですー」

「ーそうだな」

悔しいな、と。

吐息の中で繰り返した澄尾の声は、ひどく透明だった。

練習用の鞍を取りに走る明留の背中を見つめていると、千早が、音もなくこちらに近付いてきた。

「あなたは、それで構わないのか」

はたと振り返り、千早の静かな目とぶつかって、気付かれたか、と澄尾は苦笑する。

「……俺には、どうしようもないことだからな」

仕方ないのだ。こればかりは。

「嫌われても、疎まれても、せめて、あの女が少しでも幸せになって欲しいと願うことだけは、許されると思ったんだ」

ああ、でも、やっぱり悔しいなあ。

そう言って澄尾がおもむろに放った矢は、吸い込まれるようにして、的の真ん中を見事に射抜いたのだった。

